

Documentary  
Dream Center

SELF AND OTHERS

# 日中 ドキュメンタリー 映画道場

[ 文集 ]



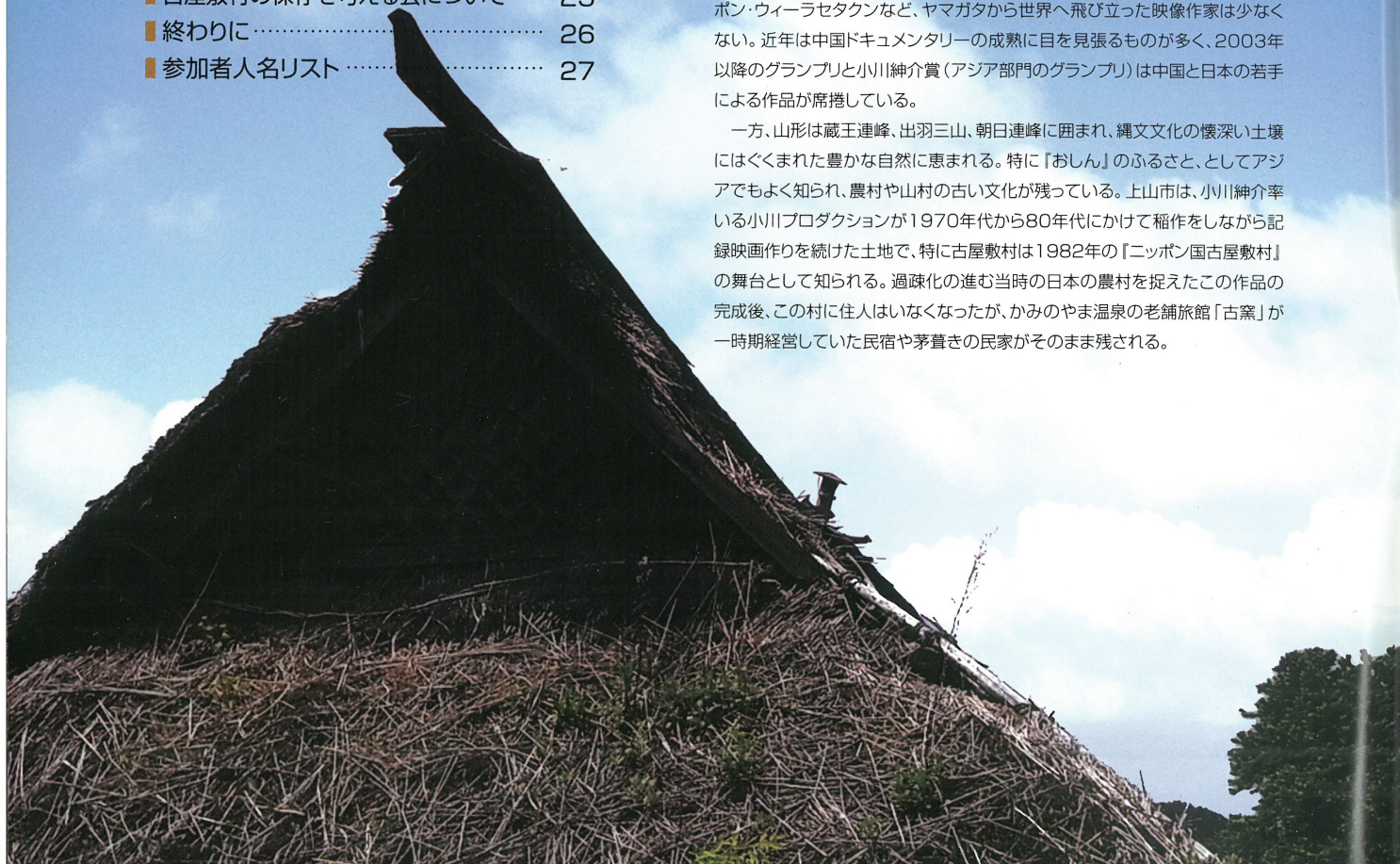
## 日中ドキュメンタリー映画道場

■ 山中の幻燈会をもう一度	03
■ 日中ドキュメンタリー映画道場とは	04
■ 開催概要	05
■ 日程表(日本語)	06
■ 日程表(中国語)	07
■ 8ミリワークショップについて	08
■ 日本ドキュメンタリーの生きた経験を学ぶ	09
■ 茅刈りについて	10
■ 生活について	11
■ 感想文	
叢峰(ツォン・フォン)(中国監督)	12
長岡野亜(日本監督)	12
若井真木子(スタッフ)	13
黄偉凱(ホァン・ウェイカイ)(中国監督)	13
佐藤零郎(日本監督)	14
佐藤賢(スタッフ)	15
池田翔(日本監督)	16
鈴木ウメ子(講師)	17
直井里予(日本監督)	17
飯塚俊男(講師)	18
毛晨雨(マオ・チェンユ)(中国監督)	18
大津幸四郎(講師)	19
馬淵愛(スタッフ)	19
渡部はるえ(古屋敷保存を考える会)	20
マーク・ノーネス(オブザーバー)	21
■ 参加者プロフィール	24
■ 講師プロフィール	25
■ 古屋敷村の保存を考える会について	25
■ 終わりに	26
■ 参加者人名リスト	27

### 映画にゆかりの地

山形には、1989年より開催されてきた山形国際ドキュメンタリー映画祭(YIDFF)があり、「映画の都」「ドキュメンタリーの聖地」として内外に知られる。特にアジアドキュメンタリーの登竜門としての知名度は高く、河瀬直美やアピチャップポン・ウィーラセタクンなど、ヤマガタから世界へ飛び立った映像作家は少なくない。近年は中国ドキュメンタリーの成熟に目を見張るものが多く、2003年以降のグランプリと小川紳介賞(アジア部門のグランプリ)は中国と日本の若手による作品が席捲している。

一方、山形は蔵王連峰、出羽三山、朝日連峰に囲まれ、縄文文化の懐深い土壌にはぐまれた豊かな自然に恵まれる。特に『おしん』のふるさと、としてアジアでもよく知られ、農村や山村の古い文化が残っている。上山市は、小川紳介率いる小川プロダクションが1970年代から80年代にかけて稲作をしながら記録映画作りを続けた土地で、特に古屋敷村は1982年の『ニッポン国古屋敷村』の舞台として知られる。過疎化の進む当時の日本の農村を捉えたこの作品の完成後、この村に住人はいなくなったが、かみのやま温泉の老舗旅館「古窯」が一時期経営していた民宿や茅葺きの民家がそのまま残される。





日本や中国の若手映画制作者の皆さんが「日中ドキュメンタリー映画道場」として南蔵王の山懐に抱かれた古屋敷村に泊り込み始めて3日目の夜、リビング兼ダイニング兼男子部屋となった古民家「谷川の庄」の座敷にスクリーンと映写機がセットされ、ワークショップで製作された作品の上映会が行われました。

澄み切った秋の夜空、天の川の下に広がる暗闇の中、古民家の広間でスクリーンに浮かび上がる古屋敷村の廃墟、木々、子どもたち。そしてその映像を取り囲む子ども、若者、おじさん、おばさんの顔々、時折動き回るカメムシの影、日本語、中国語の話し声と歓声。…「山中の幻燈会」のような、この不思議で温かな光景が、今回、最も心に焼きついたシーンとなりました。

古屋敷村は、ドキュメンタリー映画の舞台として関心ある方々には知られてきた村ですが、その後、住人は山村を降り、今は2世帯が住むばかり。

普段は虫の声とせせらぎの音だけの山村に、映画を縁に遠路様々な土地から人々が集まり歓声を響かせた夜は、今思い出せば既に幻のようで、こうした光景を再び蘇らせたいという思いは時間を経るほどに強くなります。

映画が引き寄せた素晴らしい縁と時間に感謝します。

**齋藤 真朗**

(古屋敷村の保存を考える会)

参加“日中纪录电影道馆”の日中两国青年电影工作者们住到在被南蔵王の深山环抱的古屋敷村的第三天晚上，起居室兼食堂兼男子房间的老民房“谷川庄”的客厅里摆上了屏幕和放映机，举行了在工作坊中制作的作品的上映会。

清澄の秋日夜空，银河下的黑暗中，老民房的大屋子里，在屏幕上浮现的古屋敷村の废墟、树木、孩子们。还有围着这影像的孩子们、年轻人、大叔、大婶们的脸庞、不时来回飞舞的龟虫的影子、日语、汉语的说话声和欢声……这像“山中の幻燈会”一样的、奇妙而温馨的场景，成为了本次活动中刻在我心上最深的一幕。

古屋敷村做为纪录片的舞台，在关心电影的人当中广为人知，但那之后，居民们都离开村子下山去了，现在只住了两户人家。

平时只有虫鸣和流水声的山村里，以电影为缘，从不同的土地上远道而来的人们聚在一起，响起了欢声笑语的夜晚，现在回想起来已经仿佛幻影，想让这一场景再次复苏的感觉随时间经过越来越强烈。

感谢电影为我们带来的美好缘分和时间。

斋藤 真朗(古屋敷村保存会)





日本と中国の若手ドキュメンタリー映画作家が、山形県蔵王連峰の山村・古屋敷で過ごした4泊5日の合宿型文化交流事業です。期間中は、日本の文化記録映画の黄金期を担ってきた映画職業人たちが共に滞在しました。

山形国際ドキュメンタリー映画祭2009終了直後の2009年10月15日～19日に開催。木々が色づき始める季節、前の週に山形を直撃した台風一過、連日快晴に恵まれました。

同時代を生きる日中映像作家たち同士の「国際交流」と、日本の先輩映画人との「世代間交流」を趣旨とし、ドキュメンタリー映画の上映と講師のレクチャー、8ミリ映画の撮影と自家現象のワークショップなどをおこないました。

平家の落人が都から移り住んで以来、金山や林業、養蚕などで繁栄した歴史を持ち、1980年代にはドキュメンタリー映画の名作『ニッポン国古屋敷村』の舞台となったこの村。集落の過疎化と、朽ちていく茅葺き屋根の古民家への関心を高める保護活動を行っている地域グループの全面的な協力がありました。日本と中国の参加者にとって、屋根の葺き替えに使う茅を山から刈り出す作業も印象的な経験となりました。

滝つぼと澄んだ清流、美しい森林に囲まれた集落に滞在し、地元の方が自ら収穫し料理してくれた手作り郷土料理を食することで、自然とのゆるやかなつながりが結ばれました。日に日に参加者たちの顔は輝きを増していきました。

日本と中国の青年纪录片作者们在山形县藏王连峰的山村·古屋敷渡过的五天四夜的宿营型文化交流事业。期间他们与托起了日本文化纪录电影的黄金时代的电影人们一起进行了活动。

活动于2009年10月15日～19日，在山形国际纪录电影节2009刚刚结束时举办。树木刚刚染上秋色的季节，上一周直击山形的台风已过，连日里都是晴朗的好天气。


在同时代生活的日中影像作家们的“国际交流”和与日本前辈电影人之间的“代际交流”是本次活动的宗旨，为此举行了纪录片的放映和讲师课程、8毫米电影的拍摄和自己显影的工作坊等活动。

平家的遗民从首都移居以来，曾靠金矿、林业、养蚕等繁荣过的这个村子，上世纪八十年代成为了纪录片名作《日本国古屋敷村》的舞台。为提高对村落人口过度稀疏和逐渐腐烂的茅草屋顶的老式民居的关心，与当地社区的交流，也是目的之一。对于日本和中国的参加者来说，从山上砍来修葺屋顶用的茅草这份工作，是让他们印象深刻的体验。


通过住在被瀑布和清澈的河水、美丽的森林围绕的村落里，和食用当地的人们自己收获、自己烹调的乡土菜肴，参加者们和大自然之间形成了舒缓的联系，他们的脸上一天比一天增加了光泽。





- 日 時：2009年10月15日(木)～19日(月) (4泊5日)
- 場 所：山形県上山市古屋敷村 上山市内三恵旅館
- 主 催：ドキュメンタリー・ドリームセンター
- 協 力：日中映画道場を支援する会・古屋敷村の保存を考える会
- 特別協力：特定非営利活動法人山形国際ドキュメンタリー映画祭
- 後 援：上山市
- 助 成：文化庁 

## 計画概要

- 時間：2009年10月15日(周四)～19日(周一) (五天四夜)
- 地点：山形県上山市古屋敷村  
上山市内 三恵旅館
- 主办：纪录・梦想中心
- 协办：日中电影道馆支援会・古屋敷村保存会
- 特别协办：特定非営利活動法人山形国際纪录片电影节
- 后援：上山市
- 助成：文化庁 





10/15 (木)	正午 山形駅集合 かみのやま温泉駅下車 古屋敷村へ移動	
	歓迎芋煮会 住民や関係者と交流・取材陣 [芋煮汁・芋煮カレーうどん・わかめ 入りおにぎり(東小学校のお米)・漬物]	谷川の庄
	『ニッポン国古屋敷村』上映 木村迪夫さん・飯塚俊男さんのお話	せせらぎ館
	夕食 [ごはん・かぼちゃのサラダ・鯖のから 揚げ・かき玉汁・漬物・ぶどう]	谷川の庄
	囲炉裏を囲んで交流	

10/16 (金)	8ミリワークショップ チーム分け、企画・ロケハン・撮影	古屋敷全域
	昼食(屋外) [ソーメン・ハムと生野菜のサラダ・お にぎり・漬物・リンゴ]	谷川の庄
	8ミリワークショップ(引き続き)	古屋敷全域
	大津幸四郎さんのお話 『水俣—患者さんとその世界—』ほか上映	せせらぎ館
	夕食 [ブナカノコを使ったキノコごはん・ 大根ホタテ・芋だんご汁・漬物・ラフラ ンス煮ヨーグルトソースかけ]	谷川の庄
	『大野一雄 ひとりごとのように』上映 大津幸四郎さんのお話	
囲炉裏を囲んで交流		

10/17 (土)	8ミリワークショップ(引き続き)	
	<small>カヤ</small> <small>カヤ</small> 茅刈り・茅運び作業	裏の山
	昼飯(屋外) [三色おふかし・なめこトーフ汁・もや しとほうれん草のおひたし・漬物・リ ンゴ]	谷川の庄
	各自 川遊び・温泉に入る・8ミリの 仕上げなど	せせらぎ館
	内藤雅行さんのお話 『風』『めぐる』上映	
	夕飯 [大風流手打ちそば・天ぷら・わらび の一本漬・キムチ]	
	8ミリ上映会 ■各チーム成果発表会 ■川口肇さん、大西健児さん、 鄭伽耶さんらの作品	谷川の庄
囲炉裏を囲んで交流		

10/18 (日)	布団撤去など片付け 自由時間	
	昼飯(小雨・屋内) 特別ゲストに荒井幸博さん [おにぎり・岩魚の塩焼き・岩魚の刺身・ 漬物・エノキとトーフの味噌汁] 感謝表明式	谷川の庄
	古屋敷から上山市内へ移動	
	吉原順平さんのビデオインタビュー 上映 『夜明けの国』一部上映 餅つき	上山市 三恵旅館

10/19 (月)	朝食後 解散	
--------------	--------	--





10月15日 (周四)	正午 在山形站集合 在上山温泉站下车 至古屋敷村	
	<b>炖芋头欢迎会 与居民和关系者交流·媒体采访</b> (炖芋头汤·炖芋头咖喱乌东面·包海菜的饭团(东小学的米)·咸菜)	谷川庄
	放映《日本国古屋敷村》 <b>木村迪夫·饭塚俊男的谈话</b>	潺潺馆
	晚饭 (米饭·南瓜色拉·炸青鱼·鸡蛋汤·咸菜·葡萄)	谷川庄
	围着火炉交流	
10月16日 (周五)	<b>8毫米工作坊</b> 分组·企画·找外景·拍摄	古屋敷全境
	午饭(户外) (细面·火腿和生蔬菜的色拉·饭团·咸菜·苹果)	谷川庄
	8毫米工作坊(继续)	古屋敷全境
	<b>大津幸四郎的谈话</b> 放映《水保一患者们和他们的世界》及其他	潺潺馆
	晚饭 (用 bunakanoko 烹制的蘑菇饭·萝卜瑶柱·芋头丸子汤·咸菜·煮 la france 梨加酸奶浇汁)	谷川庄
	放映《大野一雄 象独白那样》 <b>大津幸四郎的谈话</b>	
	围着火炉交流	
10月17日 (周六)	8毫米工作坊(继续)	
	<b>割茅草·运茅草</b>	后山
	午饭(户外) (三色豆饭·滑子蘑菇汤·豆芽拌菠菜·咸菜·苹果)	谷川庄
	自由活动 在河边游玩·泡温泉·完成8毫米影片等	
	<b>内藤雅行的谈话</b> 放映《风》、《邂逅》	潺潺馆
	晚饭 (大风流手擀荞麦面·天妇罗·整根蕨菜的咸菜·辣白菜)	谷川庄
	<b>8毫米放映会</b> ■ 各组成果发表会 ■ 川口肇、大西健儿、郑伽耶等的作品	
围着火炉交流		
10月18日 (周日)	收拾房间、撤掉被褥等 自由活动	
	午饭(小雨·室内) (饭团·盐烤鳗鱼·鳗鱼生鱼片·咸菜·蘑菇豆腐酱汤)	谷川庄
	古屋敷移至山市	
	放映 <b>吉原顺平</b> 的录像访谈 《破晓之国》部分放映	上山市 三惠 旅馆
	捣年糕 晚饭·宴会	
10月19日 (周一)	早饭后解散	





撮影から編集まで、ひとりで映画を制作できる「ビデオ」というメディアしか知らない現代の若手制作者たちが、8ミリフィルムを触って撮影し自分たちで現像するまでのワークショップを経験しました。講師は川口肇さんです。

フィルムは高価なので撮影で使える長さが限られています。また、今回は時間的な制約からごく簡単な編集以外はしない方針をとり、ほぼ撮った順の映像で完成させねばなりません。自然と、撮影前に作品全体の構成やねらいを熟考することになり、シャッターを押すときの緊張感も高まりました。

参加者は経験者と初心者を取り交ぜた4つのチームに分かれ、それぞれのチームに1台のカメラと6分間のフィルムが渡され、そして音声トラックを与えられました。主題は自由ですが、古屋敷の周辺で撮影することと、この音源をイメージーションの共有材料として使うことになりました。なるべく古屋敷の風景と違う、違和感のあるサウンドスケープを使うことで、映像と音が常に同期するビデオではないことを意識してもらおうという試みです。4つの音源は「東京の電車内音」「東京・谷中の公園と商店街の音」「映画『ヴァンダの部屋』より、リスボンのスラム街が取り壊される音」「晩夏、瀕死のセミの声」でした。

各チームごとに動き出す段階になると、徹底的に話し合いと絵コンテを仕込んでいく組、とにかく村をブラブラ歩いてロケハンする組、共通したイメージ(柿)に向かってひたすらコンセプトチュアルに迫る組、小川プロへのオマージュを意識する組など、それぞれ多様な動き方をして撮影を進めました。日中のコラボレーションの仕方も個性に応じて工夫していました。各チームには通訳をするスタッフがつき、さらに講師の方も同行しての制作でした。

フィルムを全て撮りきると、現像です。暗箱の中でカートリッジからフィルムを引っ張り出し、現像用の遮光容器に移します。そして時間を計りながら次々に薬品や水を通し、最後は洗濯用の小物干しや木々の枝にかけて乾燥させました。8ミリ経験者には、なるべく「実験的な」効果をねらって規定のルールを破りながら現像作業を行う人もいました。

NG部分をカットしたり、2本の3分フィルムをつなぎ合わせたりして、いよいよ上映会です。

土曜の夜、古屋敷に住む星野さん一家、出演してくれた料理班隊長の鈴木ウメ子さん、上山の関係者と一緒に、参加者たちの古屋敷のイメージがスクリーンに映し出されるのを見るひとときは沸きました。フィルムはビデオと違って現像するまで像を見ることができないため、映っていることの感激はひとしおです。

各参加者が上映前後に意図や感想を述べ、ウメ子さんや星野さんの感想をいただいたり、作品の人気投票をし、「花笠締め」で上映会は終了しました。







連日夕方、1950年代から日本の記録映画黄金期に活躍した映画人たちを招き、映画の上映を交えながらお話を聞くという連続講演会を開催しました。寝泊まりしていた「谷川の庄」から村を抜けて上っていく坂道を15分ほど歩いたところにある「せせらぎ館」の畳敷きの大部屋にスクリーンを立て、ちょうど日暮れ時に上映会を行いました。お話は中国語への通訳をはさみながら、ゆっくり、じっくりと聞く会となり、活発な活動の昼間や夜間とは異なる空気の時間が流れました。

初日は、かつてこの地で映画『ニッポン国古屋敷村』を作った小川プロダクションの元助監督、飯塚俊男さんと、小川プロを山形に招いた農民詩人の木村迪夫さんのお話。中国語字幕版の『ニッポン国古屋敷村』を上映しました。この映画を古屋敷で見ることは、「映画道場」の参加者たちにとって、自然と時間をさかのぼり、過去に生きた先人たちと身を重ね合わせるようなイニシエーションとなりました。

二日目は撮影の大津幸一郎さんです。岩波映画から小川紳介監督の初期作品の撮影を経て、土本典昭監督、佐藤真監督など日本のドキュメンタリー映画史を代表する映画作家たちと映画づくりを経験してきた大津さんは、『水俣一患者さんとその世界』ほか上映しながら、撮影の意図や効果についてお話をされました。この日は夕食後にも、舞踏家・大野一雄を撮った大津さんご自身の監督作品『大野一雄ひとりごとのように』の部分上映もしていただき、お話は身体表現や芸術論へと広がりました。

三日目は8ミリからアイマックスまで幅広い撮影経験のある内藤雅行さん。撮影所で過ごした子ども時代から、師匠のカメラマン瀬川順一さんや仲間との映画づくりのことを、フィルム会社のプロモーション用短編『風』の上映と合わせて紹介しました。全ての音を撮影の後でつけたという映画『めぐる』の上映をし、ドキュメンタリーと言えども映像が作りごとであることについて考えさせられました。

上山の三恵旅館に移った四日目は、あいにく参加できなかった元岩波映画の吉原順平さんのビデオインタビューと吉原さんが脚本を担当された文化大革命初期の貴重な記録『夜明けの国』の部分上映がされました。中国でも見る機会の少ない当時の映像を毛晨雨（マオ・チェンユ）さんら中国の監督たちは熱心に見ていました。ぜひ全篇を見たいとの声もあがりました。吉原さんのインタビューは、映画制作の原点に返る重要な示唆に富んでいました。

記録映画の青春期に創造的な現場を担っていた映画職業人たちから、デジタル時代で個人制作しか知らない若手制作者が得たもの。夕食後も囲炉裏を囲んでいつまでも話は尽きませんでした。





茅葺き屋根を再生させるための茅刈り。古屋敷では、この数年で茅葺き屋根が崩れ落ちる被害が多くなっていました。茅葺き民家の集落だった古屋敷の景観を守るためには、大量の茅が必要とされています。映画道場の日本と中国の参加者たちは、慣れない作業ながら半日間、労力と人手を提供しました。

茅はススキで、古屋敷周辺にたくさん生えています。青さが落ち、冬枯れとなったススキを刈り、村まで運んで冬の間干しておくために束ねる作業を行いました。

中国の映像作家たちの間からは労働歌と笑いが飛び交い、カメラマンの内藤雅行さんや大学教授のマーク・ノーネスさん、池田将さんたちが長身を生かして大活躍。途中から文化庁の魚津さんまでが参加してくれました。参加者の手を借りることで、この映画道場開催が地元の保存活動と結びつくきっかけとなりました。

汗をかいた後、川に飛び込んだり上山温泉でひと風呂浴びた爽快感が忘れられません。





村の入り口に立つ「谷川の庄」という民家を、持ち主の古窯さんのご厚意で、活動拠点としました。昼間は作業と食事、夜は布団を引いて寝室に早変わりする座敷。早寝早起きで早朝の山村の空気を楽しむ人たち、夜更けまで囲炉裏を囲んで通訳や筆談を交えた宴会が続く人たちが一つ屋根の下で生活しました。

寝泊まりは男女に分かれた二つの座敷、トイレは共同、風呂はなし。携帯電話の電波もほとんど入りません。男子の雑魚寝部屋はいびきがひどい、と寝袋を持って屋外で寝ることにした人もいましたが、満天の星空に大感動だったようです。

朝食は買い置きのパンなど簡単なものでしたが、昼食と夕食は鈴木ウメ子さん率いる食事部隊が毎回腕をふるい、新鮮な地元食材をたっぷり使った健康的でおいしい食事をさせてもらいました。ごはん(地元の東小学校で生徒たちが作ったお米)、採りたて野菜で作ったサラダや漬物(キムチが絶品)やおかず。初日の芋煮転じたカレーうどんをさらに翌朝食べたときの感激。

上山副市長の榎口豊さんと佐藤和美さんが命がけで山に登り採ってきたブナカノコを、たっぷり炊きこんだキノコごはん! 大根の中にハムをはさんで揚げた姿が巨大なホタテにそっくりな「大根ホタテ」は、奪い合いの争奪戦が繰り広げられる人気メニューでした。土曜の夜は大風正明さんと千恵子さんによる手打ちそば。飛島のトビウオで出汁をとった大風特製メンつゆ。天ぷらとワラビの一本漬に中国の参加者たちも大興奮でした。最終日は近くで岩魚の養殖をしているせせらぎ館さんに塩焼きを注文し、新鮮でないと食べられないという岩魚のお刺身をサービスでいただきました。

日中映画道場を見たさに立ち寄る関係者がどんどん増え、食事をする人数が連日膨らんでいきました。当初20人程度の予定だったのが、時には倍の人数の食事を工面してくださった柔軟な対応の食事班の皆さんに深く感謝する次第です。





## 映画の旅(そして新作へ)

叢峰(ツォン・フォン)

このたびの日本行きでは、滞在したすべての場所に小川紳介監督との関わりがあったようだ。私たちが到着した成田空港は、かつて小川監督が三里塚シリーズを撮った場所であり、私たちが参加した山形映画祭は小川監督に啓発されたものであり、そしてまた小川監督が『ニッポン国古屋敷村』を撮った古屋敷に日中両国の若手監督が集まり、日中映画道場に参加した。

草の上での昼食。木村迪夫さんと飯塚俊男さんという映画に登場する二人の人物が古屋敷村に戻り、私たちと一緒に座っている。まるで現実でないような気がする。木村さんは最近、詩で賞を受けている。『ニッポン国古屋敷村』の映画の最後に出る彼の詩が私は大好きで、小川映画の中で私はこの映画が一番好きである。飯塚さんは昨年、藤岡朝子さんと一緒に北京の宋荘でのドキュメンタリー映画祭に来られて、小川回顧展を行った。今回飯塚さんにお会いし、当時の小川プロでのエピソードを聞いていると、彼が過去からの使者のように思えてきた。私は飯塚さんに、日本に来る前から聞きたいと思っていた質問をした。「小川監督は成田から飛行機に乗ったことがありますか?」と。その答えは、小川さんは小川プロの中で最初に成田空港を利用した人で、しかもそれはベルリン映画祭で『ニッポン国古屋敷村』を上映するためだったという。これはとても面白く、意味深い事である。きっと、ドキュメンタリー映画のある種の境遇を説明している。

村の一番上のほう、もともと田んぼだった所が今は平らになり、焼き魚の店がある。私たちは毎日午後ここで映画を観て、講座を聞いた。ここで再び『ニッポン国古屋敷村』を観たのだが、これがとても違った体験で、かつては気に留めなかった細部に気が付いた。この映画は完成された宇宙そのものだ。映画が終わって画面が暗くなり、室内が暗闇になって、音楽だけが流れ続けている。スクリーンの後ろの窓ガラス越しに外の木々を眺めると、古屋敷村の夜の風景がこの『ニッポン国古屋敷村』という名の映画をすっぽりと包み込んでいて、この映画の最後の音楽が古屋敷村の暗闇全体に向かって散り、浸み込んでいる……。

小川監督と土本監督のカメラマンを務めた大津幸四郎さんと、囲炉裏を囲んで話をしているうちに、この老人の力を心で感じる事ができた。大津さんはときどき微笑みを浮かべる。精神力と体力はどちらも若者に引けを取らないだろう。彼の体からは、続いている生命力と信念を感じる。大津さんは、彼らの年代と今の若い人は似ていると言う。この言葉にはとても励まされた。

私は朝子さんに頼んで、『ニッポン国古屋敷村』の最後に道を歩くお婆さんが言う「オレ歩いて行っていい?」という日本語をアルファベットで私の手に書いてもらい、その手を映しながら当時お婆さんが歩いたあの橋を歩くことで、小川監督に対する敬意を表した。

茅を刈り、8ミリを撮り、午後は講座を聞く。夜の帳が下りてから、私たちがようやく宿泊所になっている下の大きな日本家屋に帰って行く。もてなし心の熱いお婆さんたちは、私たちの為に美味しい料理を作って、帰りを待っている。夜には酒を飲んで語り、道場は酒場に変わる。いや、道場と酒場は両立するのだろう。映画の他にも、友情と団らんは不可欠なだから。新しい友も、古い友も、すべての人が日常生活の煩わしさから抜け出し、贅沢で美しい映画の祭日を楽しんだ……。

上山温泉の旅館での最後の夜、私たちはどれほどの酒を飲んだのだろう?

次の日の朝、私たちは出発前に旅館のロビーで朝子さんに会った。彼女は「あなたたちが去ったら寂しくなる」と言った。私も同じです。



## 日中ドキュメンタリー映画道場の日々。

長岡 野亜

山形行きが決定したときから今回は山形を満喫しよう、と思っていたので道場のお誘いがあったときも即OKの返事を出しました。映画祭と山形という土地、小川紳介監督の息吹にも触れてみたかったので、合宿にも参加できて大満足。古屋敷村をぶらぶら散歩していると映画『ニッポン国古屋敷村』に出演されていた方々のご家族と出会い、家を案内してもらいながら当時のことなど話を伺うことも出来ました。

合宿は携帯電話も通じない集団隔離生活。スケジュールもゆる〜い感じで大まかに決められていて、最初は「いま何待ち?」と聞いていましたが、いつの間にか久しぶりに集団でのんびりしゃべりながら過ごす楽しさを味わっていました。ワークショップで飯塚俊男さんによる小川プロ、小川監督話もオモシロかったし、大津幸四郎さんからは撮影の醍醐味を、内藤雅行さんからは生持撮の話など、映画作りでアレコレ工夫されている話は刺激的でした。彼らの携わった映画を鑑賞し、制作話を聞くのに3時間、食事をしながら、その後は囲炉裏を囲んで深夜まで映画にまつわる話をする日々。毎日寝不足ながらも地元のおばちゃんたちの豪華なヘルシー料理のおかげで心身快調に過ごすことが出来ました。

8ミリワークショップでは、日本人と中国人と一緒に作品を作ることにより、言葉は通じずとも自然と映像がコミュニケーション手段になっていました。

合宿は終わって皆それぞれの現場へと散らばっていきましたが、この合宿に参加した人たちとのことは思い出とともに親近感を抱き続けることでしょう。ステキな出会いの場を作ってくださり、心から感謝しております。





## 後ろ向きに歩く

若井 真木子

目的地に向かう道中、特に短い距離というのは、誰となく一緒になって、何気ない会話が交わされて、なおかつ短い間の人間関係というか、いつも結構緊張する。一日一回は往復した、谷川の庄からせせらぎ館をつなぐ緩い坂道。5、6人の中国人グループと一緒に坂を登り始め、中国語の笑い声の後に、ジ・ダンが日本語で通訳をしてくれて、私一人で時差をつけて笑って歩いていた。するとホアン・ウェイカイが、先頭に立って、後ろ向きに歩き出した。彼が、編集作業で腰を悪くしていることを聞いていた私は、後ろ向きに歩く方が良いのかな、と思いつつ不思議に思って聞いてみた。ジ・ダンがまたそれを通訳してくれて判明したのは、何と、後ろ向きに歩けば、私たちの顔を見ながら歩けるから、という理由だった。昔みた「ちびまるこちゃん」の、山道を後ろ向きで歩くと疲れにくい、というエピソードを思い出して話そうとしたが、それを聞いて、言うのはやめた。そんなことを考えているうちにも、ウェイカイは淡々と上手い具合に後ろ向きに歩いていた。ここに何か深い意味があるのか、ないのかは、ともかく、私の日中映画道場の記憶は、このショットに集約されている。

## フィルムで撮る

黄偉凱 (ホアン・ウェイカイ)

もうDV (デジタルビデオカメラ) で7年間撮っているが、フィルムで撮ろうと考えたことはなかった。なぜなら、撮り始めたとき、デジタルが必ずやフィルムに取って替わるだろうと分かっていたからだ——あたかも、トーカーがサイレントに、カラーがモノクロに取って替わったように。それは論じたこともない定説だった——だが、今年の山形映画祭の後、主催者がある「道場」を企画し、わたしは初めて8ミリフィルムを体験した。わたしは、フィルムで撮る機会を得たが、そのプロセスは一貫して不思議な興奮をおぼえるものであった。



我々の活動場所は小川紳介が映画を撮った古屋敷村であったが、主催者がたいへん骨を折ってくれたというべきだ。かつての小川の助監督やカメラマンが我々のために講義を行ってくれた。それから、専門の先生が、我々に8ミリカメラを使うテクニックと現象の一つ一つの手順と詳細を教えてくれた。フィルムは在庫のみで、カメラもすでに生産されていないという。我々受講生はとりわけ注意して扱った。大体60分くらいの技術解説の後、受講生は3分間の8ミリフィルムを一本ずつ渡され、ショートフィルムを撮ることになった。わたしは佐藤零郎という日本の若い監督と組んで、一台のカメラを使った。音声は先生が前もって準備したもので、各班に配られ、我々A班には、地下鉄の進行—停車—進行という音源が割り振られた。

始まると、佐藤から、共同監督のそれぞれが3分ずつカメラを持つこと、また音源に基づいて撮る画は一本の川の流りが合っていると提案があった。彼は、映画のテーマは死についてだと言ったが、わたしはむしろ愛だと感じた。しかも川べりに女性がいるだけで十分だと思った。だが、彼は男役がぜったい必要だと言った。その結果、口頭で決めたシナリオは次のようなものとなった——仲睦まじい若い男女が川べりで小さな葉舟を流す。その後男は故郷を離れ、女は留まる。再びそのゆかりの地にやって来た年老いた女は、川に白いハンカチを流す。そしてすでに死んだ夫を想う——。

先生が撮影後ごく簡単な編集なら可能だと言っていたので、わたしはショットごとに絵を描き、ショットの長さを決め、それから、映画の語りの順序に従って撮影したかった。わたしと佐藤の意思疎通は全部中山大樹の通訳をとおして行われた。大樹は中国のインディペンデント映画をこよなく愛する映画祭のディレクターであり、中国語が流暢で、しかも人柄が温和であった。議論を始めてほどなくして、時間が足りないことをはっきりと意識した。すでに正午近くであったが、日暮れ前には撮影を終えなくてはならない。しかも露出計はなく、光の明るさは目測するほかなかった。カット割りの下絵を描き終えないうちに、我々は慌しく易思成夫妻に若い男女を演じてもらうことにした。年老いた女性主人公は、我々の食事を切り盛りしてくれたウメ子さんに扮してもらった。若い女性と年とった女性が同一の人物であることを示唆するため、一枚の青緑で花柄のあるスカーフを使うことにした。撮影を始める前に昼食の時間になったが、わたしは先に数ショット撮るべきだと提案した。なぜなら、ちょうど正午で、陽の光が燦々としていたからだ。前段の3分間は佐藤が撮影した。わたしと大樹は川に木の葉と葉舟を流す任務を負った。もともと傍らで見物していた藤岡朝子は我々に促され「スタート」、「ストップ」と声を上げ、時計を見て設定したショットの長さをコントロールし、また真木子はスクリプターを担当した。わたしは、易思成が木の葉を流すのを手伝っていたときに、靴を濡らしてしまったのを知っていたが、その後わたしの方が川に落ちてしまった。それでも、わたしは川のショットを二つ撮り終えて昼食にするのを買った。



わたしは着替えて、濡れたものをみんなが食事をする芝生の上に干した。毛晨雨は気前よく山形市で買ったばかりのナイキの靴を貸してくれたが、わたしは、穿くのがもったいなくて、つっかけを穿いていた。よくドキュメンタリー映画の監督は、一般に劇映画の監督より付き合いやすいと言われる。そんなふうと言うのは、だいたい映画祭のコーディネーターや通訳などスタッフであるが、わたしはそれが職業習慣から来るものであると説明している。ドキュメンタリー映画の監督は、いつも撮影対象と友好的に付き合い、相手から信頼と撮影の許しを得なくてはならない。しかし、劇映画の監督の作業状況はこれとは異なる。彼はいつもスタッフに「仕事を急ぐ」よう指揮する。一日遅れたら、何十万何百万という損失が出るかもしれない。彼の普段の仕事態度や話し方がどうであるかが想像できるだろう。わたしは今、そんなイヤなやつになっていた。たとえフィルムや機材、スタッフがすべてタダだとしても。わたしは、太陽の高さから、残された撮影可能な時間が3時間ちょっとしかないと見積もった。

そして、しきりに佐藤や大樹にはやく食べるよう催促し、さらには、大樹のあのきれいな懐中時計をとり出して、3分ごとに今何時だか易思成に伝え、「制作班」に午後1時半前には食べ終えるよう求めた。

撮影を再開したとき、わたしは川辺の光が変わってしまっているを感じた。易思成のショットは一つだけで、しかも後姿だった。彼は後で「男性主人公なのにどうしてワンショットで死んじゃうの?」とずっと皮肉を言っていた。彼の夫人を撮ったとき、佐藤は、スカーフを持ってくるのを忘れてしまった。それだと、観客は、女性主人公が若いときから老いるまで同じスカーフを着けていることが分からなくなってしまう。佐藤はさらに女性主人公の日常や屋外の風景ショットを撮った。

わたしが後段の3分間を撮る番になったとき、すでに夕方が近く、明らかに光が足りなかった。我々は川の流れに沿って上流へ急いだ。より多くの光を得るために。映画の「end」は、川原の石に書き、クレジットは、画用紙に書いて一頁一頁撮っていった。わたしは進んで佐藤の名前をわたしの前に書いた。

次の日の朝、まだ十数秒のフィルムが残っていたので、わたしと佐藤は互いに作業風景を撮った。我々は全チームの中でフィルム現像の一番乗りを勝ち取った。暗箱でフィルムを手探りしているとき、多くの人が床に半ばへばりつくわたしの滑稽な様子を取り囲んで見ていた。わたしは厳格に先生が定めた時間に則って一つ一つ現像の工程を行い、また、大樹に写真を撮ってもらった。なぜなら、これがおそらくわたしの最初にして最後のフィルムを使った撮影になるだろうから。文章の冒頭に書いた通り、もし今後幸運にも誰かがわたしにフィルムで撮る費用をくれたとしても、わたしはデジタルで撮ることを選ぶだろう。



## 黄偉凱とコンビを組む

佐藤 零郎

目をつぶりながら電車の音を聞いた時、閃いた。電車の移動・流れるイメージ。

この古屋敷村の中で流れるイメージのモノ。「川だ!」古屋敷村の僕たちが泊らせていただいた屋敷の裏には川が流れ滝があった。

自分の(イメージ、アイデア)を人に話すのは緊張する。

「安易だ!」「面白くない!」と言われたらどうしようと不安になる。

8ミリを音にあわせて映像を撮る。コンビを組んだのは黄偉凱『現実、それは過去の未来』の監督。映画は観ていない。彼も僕の『長居青春酔夢歌』は観ていない。

黄偉凱は顔の表情がめったなことではうんとも寸とも動かない。何を考えているのか読めない人物だ。

通訳者の中山さんにたどたどしい日本語で映画のイメージを話す。まずは僕がクチビを切った。

とにかく思い着いたことはすぐに口に出さないと消滅してしまいそうで急いで話す。

僕の散らかった話を中山さんは落ち着いて1つ1つ訳す。黄偉凱を見つめる僕。



黄偉凱の何も映らない電源の入っていないブラウン管のような顔にパッと明るい笑みが映るのが見えた。中山さん「いいアイデアだ。」と嬉しそうに、安堵の表情を浮かべながら訳す。

そして僕らの班は動き出した。

他の班の音聞きがまだ続いているのに、早速動きだす黄偉凱。なんて気持ちのいいせっかちだろう。

黄偉凱、紙とペンで変形した4:3の枠を書く。僕にはない几帳面で丁寧。川にあわせた物語を作る。

黄「日本では川に何かを流す風習があるのか？」

零「灯籠流しと白線(白い布)流しは知ってる。」

黄「それで(白い布)行こう！」

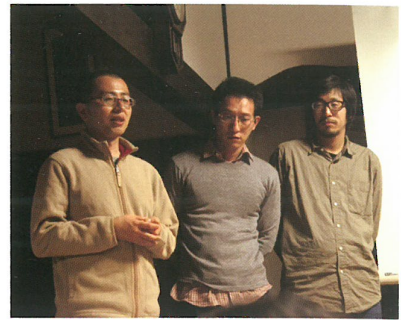
零「誰かが死んで布を流す、不在のイメージはどうだろうか？」

黄「恋愛物語はどうだ？」

二人のアイデアを足した物語ができた。

物語を作る間、陰の功労者、池田君が主演女優に鈴木ウメ子さんを連れてくる。

撮影ははなから黄偉凱が川にはまったり、笹の舟を食堂のおばちゃん達に作り方を教えてもらったり、走りながら、跳びはねながら撮り、楽しかった。



そして現像も仕上がり上映前の最後の編集。

僕は共同監督として最もやってはいけないことをやってしまった!

最初のシーンのミスショットをエンドロールの後につけるというのを僕は黄偉凱との相談をせずにやってしまったのだ。

エンドロールが終わってから撮影日記のような形で面白いんじゃないか。エンドロールの後なので大丈夫だろうという僕の甘い考えだった。

黄偉凱も楽しむだろうと思った。

しかし、彼が怒ったのは、これまで一緒に共同作業をやってきたのに、最後の最後で僕が勝手に編集をやってしまったことだった。

上映会のときはエンドロールが終わってすぐに映写機を止め、難を逃れた。だが黄偉凱の心には傷を残してしまった。

## 贅沢な時間

佐藤 賢

日中の若手映像作家十数名が、古屋敷村で「映画道場」に参加する——。聞いただけでわくわくするような出来事にスタッフの一人として立ち会うことができた。私自身、語学スタッフとして力不足であり、もどかしさを覚えた方も多かっただろうが、監督同士は意外と交流が成立していた。そこは監督同士、映画が共通の言語なのだろう。少し羨ましかった。

まるで通過儀礼のように古屋敷村において『ニッポン国古屋敷村』を観ることから始まった道場は、日本のドキュメンタリー映画制作を支えてこられた先輩方のお話、デジタル時代に忘れがちな映画制作の手触り感を再認識するような8ミリによる撮影・現像・上映、そして茅刈り……と、とても贅沢な4日間であった。

濃密な内容にもかかわらず、どこか山の天気にも似た気まぐれで緩やかな雰囲気であったのは、参加者は少数精鋭であったものの、道場が、日中両国の実に多くの人びとの思いによって実現したものであったからだろう。かたちとしては小規模であったかもしれないが、より広がりをもった活動であった。その意味で本当に贅沢な活動であった。何より、「古屋敷村の保存を考える会」をはじめ、現地の方々の思いが私たちを支えてくれた。「衣食足りて…」というが、受け入れ態勢が万全であったことが道場成功の大きな要因であった。

そうした支援してくださった方々や古屋敷の方々も交えて行われた、8ミリ上映会は、さまざまな関係性がかたちになった、映画の原点とでもいえるような時間と空間であった。古屋敷に人が集い、新しい出会いが生まれ、映画がつくれる——古屋敷は躍動した。ただ、私たちは、映画を土地にかえすことができたのだろうか。それはこれからの私たち一人一人の仕事の中で、たえず問い返されるものなのかもしれない。少なくとも種は蒔かれた。さまざまに蒔かれた種がこれからどう育っていくのか、目が離せない。道場に係わったみなさん、ありがとうございました。



## 山形・カメムシ・東京・池田

池田 将

山形から東京へ向かう深夜バスで体調が急変した。  
 早朝の東京駅に着いた頃には意識が朦朧としており、かなりのグロッキー状態に。  
 すぐに帰ればいいものをなぜか近くにあった牛丼屋に入り朝定食を注文。  
 案の定、定食を半分以上残しそそくさと店を出る。  
 全身を駆け巡る悪寒に耐えながら電車を乗り継ぎなんとか帰宅。  
 すぐに病院に行くと、診断の結果は新型インフルエンザだった。  
 普段あまり風邪などをひかない体質だったで少々驚いた。  
 山形での10日間の滞在で知らぬうちに無理がたたったのかしらん、と思いつつ帰宅。  
 即座にベッドに潜り込み、わんぱくなウイルス共と格闘開始。  
 世間を賑わす新型インフルエンザなど寝れば治るだろう、と完全に侮っていた。  
 ベッドに入ってから10分も経たぬうちに白旗を掲げる。  
 どの体勢にしてみても体は気だるく、咳・鼻水・頭痛の乱れ撃ち。  
 苦しさを紛らわすためか、部屋で念仏のようにひとり言を言い出す始末。  
 「はあ、はあ…苦しい…いや、苦しくない…あ…昨日まで山形いたんだよな…  
 山形か、…そうだ、…山形、…行ってよかった? ……そりゃとてもよかったよ…  
 普段出会わない色んな人、出来事・映画に遭遇したしな…『カビールを巡る旅』すごかったな…  
 もう一度観たいな、…村でやった茅葺き作業、…ありや大変だったけど新鮮だったな…  
 茅を刈った切り口が血のような色だったな…作業の後に食べたおにぎりと漬物、…美味かった…  
 村で食べた料理はどれも抜群だったな、…そういえば古屋敷村で見た星は綺麗だった…  
 あんなに闇夜が黒いと思わなんだ、…はあ、…はあ、…辛い、…死ぬ、…のど渴いた、…」  
 ベッド脇に用意していたポカリスウェットを手にとると一気に飲み干す。  
 五臓六腑に染み渡ったポカリによって少々体が楽になる。  
 深呼吸をしながら部屋をうろつき、何気なく天井を見上げる。そこには一匹のカメムシがいた。  
 古屋敷村でさんざん出くわした見慣れたカメムシだった。  
 奴の思わぬ登場にしばし驚き見つめ合う。  
 手を叩いてみたがピクリとも動かない。  
 無理くり部屋から追い出そうとして臭いを発せられても困るので放置しておくことに。  
 何だこの状況は? と思いながら再度ベッドに横たわりカメムシを見つめる。  
 全く動く気配がないカメムシを見ているとなんだか不思議と落ち着いた。  
 「長旅お疲れさんでした。…東京の空気はどうですかね? ……まあ、ゆっくりやっていきましょうよ。」  
 そんなやりとりをしたかどうかは定かではないが、カメムシを見つめながら私は深い眠りに落ちた…  
 今ビールを飲みながらパソコンに向かいこの文章を書いている。デジタル時計は三時五分を表示している。  
 続きをどうするか決めかねている。制限文字数もそろそろ限界だ。  
 どないしたらいいかしらん、と天井にいるカメムシを見上げ聞いてみる。  
 相変わらず奴は所定の位置にぶら下がっている。  
 一ヶ月前より若干移動したようにも見えるが、計測をしたわけではないので定かではない。  
 どないしましょ? ともう一度聞いてみるがやはり反応はない。  
 とりあえず煙草でも吸おうと思いカメムシのいる部屋を後にする。  
 デジタル時計は三時四十一分を表示している。







## 鈴木 ウメ子

周りの山も少しづつ紅葉が始まっている。

ふうー 空気がうまい! すがすがしい!

マイナスイオン!

三十年前までは定期バスも行き交いし、子供達の声も賑やかで活気ある古屋敷だった。

一軒、又一軒と生活のしやすい便利な市街へと移り住み、今、県外から移住して古屋敷に住む人は7人だけになってしまった。

この静かで自然に恵まれた土地、場所で10月15日～18日まで日中ドキュメント映画道場が開催され、私は食事の担当をさせていただく。どんな料理をお出しすれば喜んで食べて下さるのが一番不安でした。

皆さんを暖かい心でお迎えし、愛情いう調味料をイッパイ注ぎ作らせていただこうと……。こんな気持で四日間を過ごさせていただきました。

生まれた国と場所は違っても、にわか作りの手話で、ズーズー弁で思ってる事、言いたいことが通じた時は嬉しかった!

そして又、一人ひとりの口に合うような食事ではなかったにしろ、おいしそうに食べていただいた事、涙が出そうな位感謝でした。

各班に別れて、時間の経つのも忘れ一生懸命研修している姿、熱心さの余り川に落ちた人も……。

私も映画の中の何秒間に出演出来て、人生のいい思い出になりました。

“逢うは別れのはじめなり” といいますが、別れは辛かったです。

古屋敷で研修した事、これからいろんな土地での研修を生かしながら、どうぞ素晴らしいドキュメント映画の監督さんとしてデビューする日をお待ちしています。そして、この研修会に私達がかかわらせていただいた事に感謝しています。

四日間、にぎやかな声が谷間にこだまし、自然の植物達も久しぶりに息返った感じだったでしょう。又、いつか古屋敷でお逢いできる日を望んでいます。



## あたたかさに包まれて

## 直井 里予

「古屋敷村へお客さんを連れて行くのは、2年ぶりになるなあ!」

かみのやま温泉駅から村へ向かう一本道。タクシーの中で、地元で生まれ育ったという運転手さんの今昔話を聞きながら、ワクワクしながら古屋敷村へと向った。道路沿いには柿の木が連なり、収穫目前の熟した柿の実が夕陽に照らされ、やわらかな色合いを帯びていた。タイに移住し10年。日本へ本帰国したい……。そんな気持ちになった。

釜山映画祭での上映と重なったため、3日目からの参加となった。ヤマガタで出会った監督たちとの再会も楽しみだった。皆きつと疲れ果てているだろうな……。後半からの参加に後ろめたさを感じながら、道場へと向かった。しかし、数日ぶりに会う監督たちの生き生きとした表情をみて、そんな私の同情は無用だったということに気づかされた。

「一体皆、ここでどんな時間を過ごしていたんだろう……」

そんな私の疑問はその夜、すぐに解けた。手作りの美味しい郷土料理と地元の方々とのあたたかな触れ合い。お酒を飲みながらの語り……。上映会での映像を見て、講師の方々、村の方々、そして自然に囲まれながらの楽しそうな撮影現場が目に見えた。そして、私は途中から参加したことをその夜、心から後悔したのだった。それでも一晩だけでも古屋敷村で時を過ごすことができ、幸せな気持ちに包まれた。

最終日、大津幸四郎さんに深夜まで色々な話を聞く事ができたことは、貴重な経験となった。大津さんに教わったことを頭に叩き込み、今後の撮影に生かしたい。

小川紳介たちが古屋敷村で映画を作り続けていた時間を想像し、羨ましさも感じながらの2日間だった。地元の皆さん、映画祭関係者の皆さん、そして合宿で出会った監督たちはじめ関係者の皆さん、あたたかな時間と空間をありがとうございました!



(バンコクにて)



## ニッポン国古屋敷村 ふたたび

飯塚 俊男

日中映画道場には始まりの2日間しか参加できなかったが、2日目の日中の若い監督たちが共同して取り組んだ8ミリ映画の撮影にはいささか興奮した。29年前の映画『ニッポン国古屋敷村』の舞台がまぼろしのように蘇ったからである。私は『細毛家の宇宙』の毛晨雨監督班についていたが、彼が橋のたもとの佐藤みえさんのお宅を訪ねると、娘さんが貝の化石を持って現れた。29年前みえさんが小川プロの16ミリカメラに撮らせて下さったように、今度は中国の監督が構える8ミリカメラの前に娘さんが化石を持って立っている。化石は時空を越えてふたつの映画に登場する。とはいえ、毛監督がどのような8ミリ映画に仕上げたのか、残念ながら見届けることはできなかった。

中国の監督たちのドキュメンタリー映画はDVカメラで始まっているが、たとえ8ミリであってもフィルムでしかも古屋敷で映像を撮ったことはとても大切なことだと思う。映画はフィルムで始まったというのが原点である。



## 立つ故人

毛晨雨(マオ・チェンユ)

霜に赤く染められた柿林を抜けると古屋敷村であった。温かい太陽の下に、橋のたもとの红柿が揺れ、橋の向こう端は未知なる他所に伸びていく。

私たちの生命には多くの他所が存在し、橋詰にて契約されているのが日本国の記憶である。私たちは記憶を探ってきて、この隠逸たる山奥の旧跡にてと約束をした。風の呼吸が嗅げる一冷たい空気は此処より牧野村へと吹き、そこには風の形跡が蓄えられている。中国東晋の詩人陶潜が、半生名利の場で斡旋し、つい塵を払い、野山に隠逸し、松明を燃やし、茨を持ち、酒と談笑に自然を味わった。簡素で古風な道場と言えよう。小川を記念し、中日の作家たちが木の床に座り、卓上が寥々とし、閑逸した清音がまるで滝のよう、道が索漠として落葉の時。

小川プロの大津先生は古希を過ぎ、白髪が枯れていながらも、老朽の身を映画に投じている。さらに二十年、もしかしてもっと長く働くとおっしゃった。彼を見るたび親近感を覚え、まるで自分の未来を直面しているようだ。彼が立つだけで、映画の風景になる。逝き去った「突っ立つ死体」(土方巽)たちが日本の哀玄の美をもって寂寥清幽を届けている。小津が立っていて、小川が立っていて、芥川が立っていて、川端が立っている。南山昨夜の雨、黄葉我が身を瘦せ、空境を顧み、層林が露に染められる。自然行進している宇宙、朽ちて尽きぬ死体が美酒と柔らかい柿肉に化し、我らが舌の瞬間的味覚に残り、生きている我らが故人の道を継承していく証人になる。

山が広々として美しい。わが志は淡泊として立つ。わが生命の尽きていない部分は、七分が土地を想い、三分が土に入る。雄大闊達を求めて来て、自然の道に順応し、心に幸福感がいくすじもいくすじも立ち昇る。私は思う：ぜひ橋の向こう端の他所に固執し、中国農民の秘密の意志を呈しよう。

2009年11月12日、上海にて。





## 日中映画道場、てんやわんやの記

大津 幸四郎

日中映画道場、今回が初めてということもあって、盛り沢山の行事をこなすのに精一杯で、参加者どうしがたがいの状況や経験をぶつけ合う余裕がなくて、お開きになってから三々五々、眠る間を惜しんで語り合う様子、それが残念といえば残念でした。

今回の呼び物の一つは、8ミリフィルムを使っている何人かのグループに分かれての共同制作でしょう。これまでDVカムのカメラしか使ったことがないという中国からの参加者、8ミリカメラ扱ったことはあるが、と心もとない一人、二人の日本側参加者。各人の持ち時間が2分あまりという短さなのに、あれも撮りたい、これも撮りたい、でも許容フィルムはないということで、パニック状態に陥り、撮る前の短い間に、撮影ショットを整理し、ショットの中味を考え、撮影秒数を思い、デジタル撮影の漫漫の経験しかない若き演出家達は事々に面食らいながらも、真っさらな体験を嬉々として楽しみ始めた。そして現場経験の多寡、性癖などの違いに応じて、ものの存在にそってイメージを組立てたり、存在をイメージの影で覆ったり、各々の個性が透けて見えて、傍らで見ていてもひどく楽しくなってくる。



山里の自然音、生活の音、谷川の水の流れ、滝が落ち、鶏が鳴き、蝉がなく、学校から子供たちの声も聞こえる、列車が駅を出る、鉄橋を渡る、さまざまな山里の音を聞き、イメージを絵に作り上げる、それが与えられた課題。撮影は二日に渡った。

その後は、移動暗箱での撮影済みフィルムの現像作業。えっ、現像も自分達でやるの。昔は現像は映画カメラマンを志した者達の映画世界へのとば口の必修課目だった。現像されてはじめてフィルムは映画フィルムになった。中国で最初の記録映画は確か延安の洞くつで作られた筈、あの頃もこんな小さな暗箱で、手作業で現像したのだろうか。素朴な、人間的な手作業が全ての始まりにあった。私の妄想は次々に拡がっていった。

最終日、彼らの映画体験は何編かの短編になった。質の高い作品とは言い難いが、初々しい、稚拙な素朴さが印象的な、青春のメモワール。

最後の夜。私はこれまで、映画は幾つかの才能の共同作業の上になる物であり、共同作業が映画の中も厚みも殖すると言い続けてきたが、中国の若き演出家達から、身近に親しく映画について語れる友人は全く居ない、ましてや共同制作者を見付けるなどは至難の業で、中国でこれと思う人、会いたいと思う人が現れても、会いに行くだけでも何日もかかってしまし、金銭的な余裕もない。孤独に耐え、独りで作りつづけるしかない、気が狂う程の孤独と不安をかかえながら。でも作り続ける心の火は燃やし続けると、熱をこめて次回作を語り続ける。熱を籠めた若者達との語らいから、私も作り続ける熱と元気をたっぷり吸い込んだ。感謝!

## Eiga Dojo

馬淵 愛

映画祭表彰式の翌日、20名近い日中の監督たちが、山形駅の改札前に集合した。それぞれの世界を抱えた個性豊かな面々は、共に奥羽本線に乗り込み、緑まぶしい風景が広がる車窓を眺めながらかみのやま温泉駅へ向かう。そしてかみのやま温泉駅から、地元の旅館が提供してくれたマイクロバスに乗って、古屋敷村へ向かう。

古屋敷村は、人口10名以下の静かな、静かな村だ。そんな村に、ほんの数日間とはいえず住民の倍以上の人数が寝泊まりすることになった。

この合宿生活は、上市市の町づくりや古屋敷の建物保存に携わる人々の、献身的な協力に支えられた。宿泊所の掃除、布団や簡易トイレの手配、地元的新鲜な食材を使った食事、そして片付け。山形に来るといつも、土地の事を何も知らない私は、このもてなしに甘えてしまう事になる。

携帯やインターネットから解放された環境の中で、私を含めた参加者達は、まるで役を与えられたかのように、次々と起こるエピソードの一部になっていく。そんな私たちの生活は、古屋敷村の電灯の数を僅かながら増やし、その灯りは紅葉が少し深まった4日目に消えた。

時が経つほど、ふと蘇る古屋敷の記憶と、それに伴う感覚は少しずつ変化している。しばらくは、変化していくままにそっとしておきたい。この記憶はきっと、この世界の片隅で新たな発見を促してくれる事だろう。





## ニッポン国古屋敷村 映画道場を終えて

渡部 はるえ

生きている事で感じる自然の流れの中で繋がって行く縁とは不思議なものです。

古屋敷村に不思議な魅力を感じ、この村をこのままで良いのかと本気で考え始めてから6年になります。古屋敷への思いを話していくうちに、ようやく同じ思いを持つ人たちと出会う事が出来ました。

上市市の榊口副市長さん・山川さん・県庁に勤務している齋藤さん達でした。それ以降イベントの実施や寒い中で、保存したいと願う「民具資料館」の屋根にビニールシートかけ等の活動を続けながら、「長い時間がかかっても諦めないで活動する事が大切であり、それが市民活動」を合言葉に頑張ってきました。今までの活動を思い浮かべながらペンをとりました。

「古屋敷村の保存を考える会」を立ち上げ、2年目、思いもよらぬ相談が持ち込まれました。それが国際ドキュメンタリー映画祭東京事務所の藤岡さんからでした。古屋敷村での「日中映画道場」開催の協力依頼でした。私達は迷いませんでした。これは絶対引き受けたい、引き受けることが今後の活動に必ず光が見えてくる、そう思いました。協力の決断が出来たのは田舎料理研究家の鈴木ウメ子さんの存在でした。これまでも古屋敷でのいろんなイベントをする時は仲間数人と共に快く協力を頂いておりました。

参加者の皆様に、心配なく食事を提供できる事が「日中映画道場」の成功の「かぎ」と思っていたからです。鈴木さん達は快く大役を引き受けてくれました。有難かったです。「精一杯協力させていただきます。」その言葉に仲間一同大変力を頂いたものです。

それからの準備は楽しみながらさせて頂きました。実施に向けての準備は私共と藤岡さんたちの二人三脚でした。

多くの方のご協力により、ようやく当日を迎えました。参加者の方々が乗るバスが古屋敷に到着した時は感慨深いものがありました。いよいよ始まる、そう思うと気が引き締まる思いでした。

考えますと、普段は静かで、ひっそりとした村が昔の賑わいを一瞬だけ取り戻した4日間でした。一緒に過ごさせて頂いたその時は私共にとって忘れられないものになっています。

引き受け側である私共にとって一番の願い、それは、参加者の方そしてスタッフの方が何事もなく元気に無事にこの映画道場を終了する事でした。でも私達の心配をよそに、参加者の方たちはもちろんスタッフの方たちも、鈴木さんを中心に心を込めて作って頂いた昼食そして夕食をおいしそうに食べられて益々元気になっていくような気がしました。また大風さんが心を込めて作った手打ち蕎麦も大変喜んで頂けたようでした。また、心配した天候にも恵まれ



ました。連日爽やかな風と青空そして夜には満天の星。本当に天も味方についてくれるとはこの事かと思いました。

やはり古屋敷村はすごい所です。

古屋敷村に3人の子供さん達と5人で住まわれている星野さんが、「久しぶりに数日間でも建物に灯りが灯った事が何より嬉しかった。」そう言われました。胸が熱くなる思いでした。今後、「古屋敷村の保存を考える会」の活動を続けていく時に、ここで頑張っている方をすこしでも応援していく事が私共のすべき事の一つであると思いました。

最後の日のお別れの会の時の事は今でも鮮明に覚えています。その時頂いた心のこもった記念のTシャツは今も大切にさせて頂いております。

日程を全て終了し、迎いのバスが古屋敷村に到着した時は皆様との別れが寂しいという気持ちと、皆様方を無事に元気に送る事ができたという安堵感が交じり合っていました。

見えなくなるまで、いつまでも手を振ってくれた皆様のごことは決して忘れられません。

あっという間の時間でしたが、沢山のの方々から支えられながら無事終了する事ができました事にこの場をお借りして心から御礼を申し上げます。

「古屋敷村の保存を考える会」はこれを弾みとして今後の活動を続けてまいります。このご縁はきっとまた続くと思います。なぜなら今は亡きドキュメンタリー映画の神様と言われている小川紳介監督率いる小川プロダクションが地元の方と苦楽を共にしながら、稲作をしながら、映画『ニッポン国古屋敷村』を完成させた地であるからです。

この地がまた多くの人々の目に触れ、訪れた方が生きる元気をもらえるような地になればと思っています。

まだまだ力不足ながら仲間と共に頑張る「古屋敷村の保存を考える会」を小川監督さんも後押ししてくれるような気がしてなりません。

古屋敷村にある「谷川の庄」の玄関を開けると、看板になった「おワリばあちゃん」が出迎えてくれます。



## 日中映画道場:アジア・ドキュメンタリーの過去と未来を巡る時間の旅

阿部マーク・ノース

映画祭とは映画作家が自らの作品を上映し、同時に観客と出会う、つかの間の場所だと考えられている。しかし実は観客に知られていない映画祭の一角では、映画作家同士の交流が行われてもいるのである。山形国際ドキュメンタリー映画祭は、これまでもアジアの映画作家が仲間を見つけ、汎アジア的で複雑なネットワークをすばやく作れる重要な場所として機能してきた。2009年度はそれだけでなく、多くの映画作家や観客が家路に着いた映画祭の「後」に、ある出来事が開催された。

映画祭東京事務局のディレクター藤岡朝子が、日本と中国の若い映画作家たちを引き連れ、山奥にある隠れ処に向かった。彼らは古屋敷村という古い村の廃屋で、レクチャーを聞き、映画を見て議論し、さらに映画制作までも行う合宿に参加したのだった。詳細を説明する前に、このワークショップを歴史的な文脈の中で考えてみたい。参加した映画作家たち——未来を担う作家たち——が過去とつながる、特にこの特別な場所とつながるというコンセプトが、この事業を名案たらしめている。

ドキュメンタリー映画は劇映画に比べて市場性に左右されることは少ないと考えられがちだが、その歴史を簡単に振り返れば、規模の違いこそあれ、主流劇映画と同じように、経済的・政治的な力にさらされていることがわかる。特にセルロイド・フィルムの時代、多くのドキュメンタリーが国家やビジネス界の宣伝機関として機能した。これは全世界的に言えることだが、特にアジアにおいては、インディペンデントな映画作家が活動を続けるのは極めて困難だった。多くのアジアの国々は権威を振りかざす政府、独裁制、戦争・植民地化・占領といった移り変わりの中でもがいていた。多くの国のGDPは低く、自主制作の映像作家にとって16ミリフィルムは手の届かないものだった。特筆すべきキドラット・タヒミックの実験映画、フィリピンの8ミリ映画、そして香港のいくつかのドキュメンタリー作品といった例外はあるにせよ、日本のドキュメンタリー映画作家たちの歴史的な経験に比べられるものはなかった。

日本では、裕福なカメラ狂いたちが1910年代から現在に至るまで、活発なアマチュア映画界を作ってきた。その最初のインディペンデント映画運動は、1929年に結成され1934年に警察からの圧力につぶされるまで続いた日本プロレタリア映画同盟であった。続いて映画作家たちは大手映画会社と独立プロの両方で、日中・太平洋戦争、アメリカの占領期を通じて活動した。ドキュメンタリーはこの時期、大きな威信を持つこととなった。1952年に占領が終結

すると、亀井文夫、松本俊夫といった映画作家により際立ってインディペンデントなドキュメンタリー作品が急速に出現した。一方、政府や企業のPRフィルムを制作している小さなプロダクションがなおも多くのドキュメンタリーを制作していた。そして経済が高度成長を続ける中、ビジネスはまことにうまくいっていたのである。

これらの会社の中で最も重要だったのが自ら映画部門を持つ大出版社の岩波だった。トップに惹きつけられ、多くの映画作家が岩波映画に集まった。しかし60年代半ばには、PR映画の限界に苛立つ優れた者たちはインディペンデントの不確かな世界へと逃れていった。その中には、監督の羽仁進、土本典昭、小川紳介、東陽一、カメラマンの鈴木達夫、田村正毅、そして大津幸四郎がいた。その後の10年間、日本は世界でも最もスリリングなドキュメンタリーシーンの一つを持つこととなった。しかしその後、インディペンデントなドキュメンタリーを制作することの困難さは増していった。理由は検閲ではなく、どちらかと言うと観客の変化だった。インディペンデントたちは、製作費を回収することのできる恒久的な配給ネットワークを作ることができなかったのだ。

アジアの映像作家たちにとって全てを変えたのがビデオだ。比較的貧しい人にも制作の機会を与え、必要に応じてひそかに作業を進めることを可能にした。1980年代にはアジア各地、特に台湾、韓国、香港そしてフィリピンで、またたくまにビデオ集団が出現した。その他の国でも、個人が可能な範囲で自分たちの作品を制作し配給した。その一人が中国の呉文光であった。彼に続いて一握りのTVや映画のプロデューサーが本業の傍らでインディペンデント作品を作るようになった。こうした中、山形国際ドキュメンタリー映画祭(YIDFF)が1989年に始まり、映画作家に作品を上映する機会を与え、時に賞金を与えるなど、多くの役割を果たすことになった。長年にわたり藤岡朝子によってプログラムされた「アジア千波万波」部門は、アジアの映画作家たちにとって活動の主要なハブとなった。彼らはアジアやさらに遠くから来た仲間と出会うことが出来るようになった。他の国際映画祭のプログラム選定者もアジアの作品を取り上げた。そして映画祭の回顧上映プログラムは、インターネットで海賊版が出回る前のこの時代に、本で読むことしかできなかった映画の古典を目にする機会を与えた。



山形映画祭では年々、中国の映画作家数と作品の質に、継続的で確実な発展を見てきた。中国の映画作家たちが小川紳介やフレデリック・ワイズマンの影響と出会ったのはここ山形であった。そして2000年代に入り、中国ドキュメンタリーは「爆発」した。デジタル・ビデオ技術が、成長する中産階級の高等教育を受けた民衆扇動家の手中に高画質のビデオをもたらした。パソコンの普及はノンリニア編集を簡単に安く行うことを可能にした。そして中国政府はインディペンデント・ドキュメンタリーの隆盛を許し、中国作品は山形の賞を独占し始めた。

1960年代の日本と現在の中国の類似性が目にとまった藤岡氏は、一瞬のひらめきで廃屋での合宿を思いついた。映画祭後、日中の若手映画作家たちを山形に残らせ、彼らに岩波映画や日本のインディペンデント・ドキュメンタリーのベテランたちとの交流をもたらす。先輩たちは5日間に渡る「マスタークラス」を提供し、それを「日中映画道場」と名づけた。

参加した映画作家たちが「生徒たち」となり、彼らの「先生」は岩波映画につながるドキュメンタリーのベテランたちだった。飯塚俊男（監督、元小川プロ）、大津幸四郎（カメラマン、岩波映画・小川プロ）、そして内藤雅行（カメラマン）らが名を連ねた。予定された先生のひとり——岩波映画の吉原順平——は最終的に参加できなかったが、彼が脚本を担当し時枝俊江監督が中国で撮った映画（『夜明けの国』、1967）が上映された。

これらのイベントは藤岡朝子と川口肇によって企画され、大西健児（映画作家）、秋山珠子（通訳）、佐藤賢（通訳）、中山大樹（通訳）、そしてYIDFF事務局のメンバーである馬淵愛（ニュー・ドックス・ジャパンのコーディネーター）、若井真木子（アジア千波万波のコーディネーター）の協力で実現された。大木裕之、加藤到、朱日坤、代島治彦、易思成、キドラット・タヒミックといった多くの映画作家、プログラマーも短期間参加した。

山形映画祭の終わりとともに、参加者はバスで山へと向かった。目的地である古屋敷村は完璧な舞台だった。それは山奥にある小さく古風な村で、小川プロダクションの「ニッポン国古屋敷村」（1982）の撮影場所である。この3時間半の映画は小川監督の最も素晴らしい作品の一つで、日本の片隅のこの小さな村に近代化が与えた衝撃を探究するものだ。茅葺き屋根の風情あふれる家々が並ぶ村には、最盛期には18世帯が住んでいたが、小川プロダクションが訪れた頃には、その半分になっていた。映画は生き生きとした過去の記憶と、崩壊に瀕する今との間を微妙に揺れ動く、

ある瞬間の村の生活史を記録している。

この10年間は確かに古屋敷村にとっていい時期ではなかった。日中映画道場の来訪を迎えてくれたのは、朽ち果てて穴のあいた茅葺き屋根だった。ほとんどの古い民家は廃墟となっていた。田んぼは野性に戻り、わずかに雑草の中でその輪郭が判別できるほどだった。ごくわずかな家が整備されていた。そのいくつかは映画に出ていた人たちの末裔によって維持されており、彼らは夏の間ここで野菜を育てていた。そして孤独と安い住居を求める2家族が新たに引っ越してきていた。映画道場の参加者が（男女に別れて）滞在した2軒の大きな家は、この魅力的な村に観光客を引きつけようとした1990年代の試みの一端だった。観光事業は失敗だったが、村の建物は保存を続ける小さなグループによって維持されていた。

初日、この保存会が、映画祭からの参加者を山形名物の伝統的な芋煮会で出迎えた。近隣の農民も集まり、映画作家たちを迎えた。その中には、小川映画のスター出演者（おそらく最後の生存者かもしれない）も含まれていた。その夜、彼らは一つの建物に集まり『ニッポン国 古屋敷村』を鑑賞。上映後、若い映画作家たちは、農民詩人の木村迪夫氏と飯塚俊男氏の話聞いた。木村氏は近くの牧野村で小川プロダクションのホストファミリーだった人であり、飯塚氏がかつての小川プロの助監督であった。今滞在している村が、活気に満ちていた時代において、若者が村を出て行くことや村がたどるであろう運命を案じる当時の村人の姿を映像に見るのは不思議な経験だった。映画道場のこの最初のイベントから、時の流れに滑り落ちていく感覚を得た。





続く2日間、参加者は2人のベテラン映画人から話を聞いた。一人は評価の著しいカメラマン、大津幸四郎氏。彼は岩波映画で仕事を始め、土本典昭のメインカメラマンになる前に小川紳介の初期の作品を撮影している。彼はまた、飯塚俊男、原一男、佐藤真、アレクサンドル・ソクーロフといった監督とも仕事をしている。大津がもっとも関心を持っていたテーマは、作り手の個人性と共同作業の試みをつなぐことだった。現在、すべての若い映画作家は最初からデジタルビデオで仕事をしており、安いビデオカメラと編集用のパソコンを使うため、そのほとんどが集団制作よりも個人作業を行う。(例外は政治的なグループ制作をしている佐藤零郎。)大津氏は異なる制作手法について雄弁に語り、参加者は専門スタッフの能力を生かす集団的な分業の力に気づかされた。

内藤雅行氏の発表はさらに強烈な印象を与えた。内藤は子役として映画の世界に入り、円谷英二のウルトラマンシリーズで特撮の仕事をした後に、偉大な撮影監督であった瀬川順一にその技術を学んだ。8ミリからIMAXに至るすべての撮影経験のある内藤氏は『めぐる』を上映した。映画を学ぶ若い監督による、絹織物の伝統染織技法についての作品で、内藤氏が撮影したものだった。撮影もすばらしいが、音響が特に印象的だった。音を映像とは別に録り、編集の段階で映像とシンクロさせて作り出したものだと内藤氏は説明した。若手監督の最近の仕事、特に中国人の場合に顕著だが、その多くが録音クルーを使わずにビデオカメラ一台で撮られている。そのため、内藤氏のこの授業はこの映画道場でもなお一層印象の強いものとなった。

これらの「マスタークラス」と、鈴木ウメ子と一行の手によるおいしい郷土料理の合い間に、参加者たちは映画を制作する実技を行った。このセッションの指導は、幾箱もの8ミリ機材を持ち込んだ実験映画作家の川口肇が担った。まず最初に、8ミリ映画を作ったことのある人の挙手を募ると、日本からの参加者はほとんどが手を挙げ、日本の映画文化における8ミリの重要性が示唆された。中国からの参加者で8ミリに触れたことがある人はいなかった。セルロイドからなるフィルムが政府映画局の管轄下であるため、許可なしに扱うことはおそらく違法とみなされるのだろう。川口氏は8ミリカメラを取りだし、編成された各チームに配分した。各チームはカメラ、何ロールかのフィルム、音声の入ったCD(その音声はほとんどが都会的なものだった)を渡され、カメラ内編集を意図した短編映画を企画・制作するのだった。

各グループはロケハンをしに古屋敷村を歩きまわった。チームによっては絵コンテを用意するまで入れ込んでいるものもあった。パッと見で決めるチームもあった。村中が撮影をする映画クルーでガヤガヤとにぎわった。その間、川口氏と助手たちは台所でフィルムの自家現像のための薬品を用意していた。映画作家たちはフィルムを撮りきったところで、台所の外に集まった。川口氏は、暗箱の中でフィルムを取り出す方法を実演し、光の入らない入れ物に入れ、現像し映像を定着させる薬品に次から次へと入れていった。

これが終わった後、フィルムを洗濯ひもにつるし、自然乾燥させた。そしてフィルムが乾く間、道場の参加者は、古屋敷の保存会から受けた善意と援助の恩返しをした。一行は山を登り、荒廃した建物のため屋根を茅き替えるための茅を刈ることに午後を費やした。みな懸命に働き、中国と日本の労働歌を歌いながら背の高い草を刈って束にしていた。フィルムが乾燥した頃、労働者は汗だくだったが、村の川に飛び込んだり、かみのやま温泉へ向かってひと風呂浴びることにした。そして山の幸のすばらしい饗宴の後、完成した短編映画を発表しあい、囲炉裏を囲んで夜明けまで談笑した。

日中映画道場は、風変わりで素晴らしいイベントだった。それは時間旅行のようなものだった。廃墟が並ぶ狭い村の小道を散歩していると、中国の村がたどろうとしている運命を古屋敷村が示していると考えずにはいられなかった。日本の過去に立ちながら、中国の将来を見る。日本と中国の今日の若い映画作家たちは、アジアのドキュメンタリー史と交流しながら、自らが可能にする未来について考えたのだった。





## ■ 叢峰 (ツォン・フォン) CONG Feng

1972年、中国河北省生まれ。1995-2000年、国家衛星気象センターに勤務。週刊新聞「国際先駆導報紙」で2002-2005年まで編集を担当。2002年、自作の詩集『Invisible Train』を発表。同年、平遥国際写真展・新中国写真部門に作品が選ばれる。2006年、長編詩『Masmediacspoeshitry』を出版。2005年よりドキュメンタリー映画の制作を始める。村の診療所待合室に集う人々の人生談義を聞かせる『馬先生の診療所』(2008)監督。

## ■ 黄偉凱 (ホアン・ウェイカイ) HUANG Weikai

1972年、中国広東省生まれ。10歳より15年間中国絵画を学ぶ。1995年広州美術学院中国画学科卒業。映画宣伝、アートエディター、グラフィックデザイナー、映画脚本家およびカメラマンを経て、2002年より監督。『飄』(2005、ニューヨークReel China ドキュメンタリー・ピエンナーレ新人監督賞)など。都会の事件映像を流麗に編集した『現実、それは過去の未来』(2009、プサン国際映画祭AND基金助成作品、シネマ・デュ・レール青年審査員特別賞)監督。

## ■ 季丹 (ジ・ダン) JI Dan

1963年、中国黒竜江省生まれ。北京師範大学中国文学部卒業後、1988年より横浜国立大学、京都精華大学に留学。その後、アジアプレスに加わり、1994年にインディペンデントでドキュメンタリーを作り始める。その後、NHKで数々の番組が放映され、チベットの農民を描いた数本のうち『古老たちの祈り』(1999)をアムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭、台湾国際民族誌映画祭に出品。YIDFF2003には『一緒に時』(2002、小川紳介賞)のプロデューサーとして参加。2007年、プサン映画祭AND基金を受けてドキュメンタリー『ホスピス医院・空城一夢』を監督。悩めるふた組の中年夫婦を描いた『ハルビン螺旋階段』(2008)監督。

## ■ 川部良太 KAWABE Ryota

1983年東京生まれ。東京造形大学映像専攻卒業。在学中より、映画から映像インスタレーションまで横断的に映像作品の制作を開始。「ここ」という場所から「よそ」へと繋がる回路として「記憶」を扱いながら、映画/映像と現実世界との関係性を考察している。主な作品に『どこかの誰か』(2004)、『雨の跡』(2005)、『家族のいる景色』(2006)、『そこにあるあいだ』(2009)など。また、2008年より友人数人と&AND(アンド)という運動体を立ち上げ、映画が「関係の生成装置」として機能するような制作活動・上映活動・ワークショッププロジェクトも幅広く展開中。現在、東京芸術大学大学院先端芸術表現科博士後期課程在籍。東京総合写真専門学校、非常勤講師。『ここにいることの記憶』(2007)監督。

## ■ 毛晨雨 (マオ・チェンユ) MAO Chenyu

中国湖南省生まれ。上海の同済大学で工学を専攻、2000年に卒業。人類的な映画の制作に従事する。2006年には、民族の多様性を描写し歴史の欠落を埋めるといったコンセプトを實踐し続けるために第二文本文字室を設立。主な作品：ドキュメンタリー映画『Soul Mountain』(2004)、『Human, Ghost, God』(2005)、『A Story of Zeng Wuhua』(2006)、『The Tale of Making a Vow』(2008)、『The Tale of Zhenyuan County』(2008)、劇映画『Da Jiang Meeting a Ghost』(2007)、『The Tale of Two Sisters』(2007)など。自分の育った村の伝統や生活を独特の自作絵画と合わせて描く『細毛家の宇宙』(2009)監督。

## ■ 三宅流 MIYAKE Nagaru

1974年生まれ。多摩美術大学卒業。初期は身体をテーマにした実験性の強い作品を制作。『蝕旋律』、『白日』はモントリオール国際映画祭等、世界10カ国以上の映画祭で上映される。近年はドキュメンタリーを中心に制作。代表作は22歳の面師が能面を彫る姿を描いた『面打/men-uchi』。若手県北上市に伝わる郷土芸能の担い手たちを記録した『究竟の地一 岩崎鬼剣舞の一年』(2008)監督。

## ■ 長岡野亜 NAGAOKA Noa

京都生まれ。映画監督・原一男氏が主宰するCINEMA塾に参加し、2002年『かけがえの前進』を製作(YIDFF 2003で上映)。2005年『はじまりの風景』、2006年『タネペリカ』など。2008年から、滋賀県・近江八幡市で市民参加型映画づくり「遺言YUI-GON~未来への手紙」プロジェクトを進行中。近江八幡市のある村で郷土祭祀が復活するまでを描いた『ほんがら』(2008)監督。

## ■ 直井里予 NAOI Riyo

1970年茨城県生まれ。アジアプレス所属。1999年からタイ在住。タイでエイズと共に生きる一家を描いた『昨日今日そして明日へ...』(YIDFF2005で上映)を発表後、続編『アンナの道』製作開始。プサン国際映画祭AND基金の助成を受け完成。

## ■ 大森宏樹 OMORI Hiroki

1983年宮城県生まれ。東北芸術工科大学大学院修士課程修了。インディペンデント・フィルムメーカーとして活動している。日常を映した私的映像作品『蜘蛛と羽虫の記憶』(2008)監督。

## ■ 大西健児 ONISHI Kenji

1973年三重県生まれ。学生時代に入手した中古8ミリカメラで映像作品の制作をはじめ。1995年映画団体シネマトレインを設立。父親の死にカメラを向けた8ミリ個人映画『焼星』(1995)は、YIDFF'97やフラハティセミナー2002等で上映された。20年分の8ミリフィルムの断片をつむいだ『尺景』(2008)監督。

## ■ 佐藤零郎 SATO Leo

1981年京都市生まれ。2006年11月『長居青春酔夢歌』の撮影開始、2009年5月に完成。2007年8月頃より大阪の中崎町周辺でドキュメンタリストを志す熟き者たちで互いに制作途中の作品を批評し合うことや、先人たちのドキュメンタリー映画、劇映画、実験映像などを批評することで力をつける。現在、張領太や梶井洋志、中村葉子、金稔万、布川徹郎らとともにドキュメンタリー映画制作集団(中崎町ドキュメンタリースペース・NDS)をつくる。現在尼崎市に在住。大阪長居公園で野宿者と住みながら彼らの強制退去を記録した『長居青春酔夢歌』(2009)監督。

(名字アルファベット順)







## ■ 飯塚俊男 IIZUKA Toshio (映画プロデューサー、監督)

1947年前橋生まれ。東北大学法学部卒業後、小川プロダクションに入る。三里塚シリーズから山形県牧野までほとんどの小川プロ作品の助監督や製作を務める。独立してから『小さな羽音チョウセンアカシジミ蝶の舞う里』で文化庁優秀映画作品賞など受賞。『木と土の王国—青森県三内丸山遺跡94』(1995)『一万年王国—青森県の縄文文化』(1996)『幸生の郷土芸人—菊地正男の遺したモノ』(1997)『縄文うろしの世界』(1998)『菅江真澄の旅』(2002)『稲と環境』(2004)など。山形映画祭を描いた『映画の都』(1991)『映画の都ふたたび』(2007)。「湯の里ひじおーり—学校のある最後の一年』(2008)プロデューサー。

## ■ 川口肇 KAWAGUCHI Hajime (映像作家)

1967年東京生まれ。ビデオやフィルムメディアを使い、フィルム粒子/ビデオノイズ/映写行為、といった「機械の生理」を軸に「世界の観測」としての映像作品制作を続けている。主な作品：『AQUARIUM』(1991)『位相Phases of Real』(1997)『異相Variant Phases』(2001)『suginami-green』(2007)『消失点Vanishing Point』(2009)、その他多数。

## ■ 内藤雅行 NAITO Masayuki (映画撮影)

1948年生まれ。1958年、子役としてテレビ映画に主演。高校中退でステールカメラマンの助手となる。その後、怪獣映画の父といわれる円谷英二監督のもと、光学撮影を学ぶウルトラマンなどの作品に参加。1969年カメラマン瀬川順一氏にカメラ助手として「弟子入り」する。1973年『円空』(松川八州雄監督)でカメラマンとして独立。以降カナダNFB製作『JAPAN』シリーズ、テレビドキュメンタリーや劇映画の撮影。中国電影合作製片会社とのIMAX大型映像『長江』の撮影に参加。2000年、自ら子どもの頃撮影した8ミリフィルムをもとに『ドキュメンタリーごっこ』を発表。『ジム』、『ソビノスミカ』(山本起也監督)などドキュメンタリー映画を撮影。現在、「演

## ■ 大津幸四郎 OTSU Koshiro (映画撮影)

1934年生まれ、1958年～63年岩波映画製作所に勤務。1963年以降、フリーランスのカメラマンとして小川プロダクション、青林舎、シグロなどで主としてドキュメンタリー映画の撮影に従事。『庄殺の森』(1967)、『日本解放戦線三里塚の夏』(1968)、以上小川紳介監督作品、『パルチザン前史』(1969)、『水俣—患者さんとその世界』(1971)、『水俣—揆』(1973)、『不知火海』(1975)、『医学としての水俣病三部作』(1975)以上土本典昭監督作品。『島々』(1993・S・アラノヴィッチ監督)、『ドルチェ』(2000・アレキサンデル・ソクーロフ監督)、『まひるのほし』(2000)、『花子』(2001)以上佐藤真監督など。2006年に『大野—雄ひとりごとのように』を監督。

## ■ 鈴木ウメ子 SUZUKI Umeko (郷土料理家)

古屋敷にほど近い小笹地区在住。東児童館廃止まで三十年ほど勤務として勤め、週3日、地元産の野菜を使った芋揚げ、ジャガイモの煮ころがし、ふるふき大根など子どもたちのおやつを用意。素材の持っている味を大切に、自分の畑で採れた野菜を自分で料理する。山形放送のラジオ番組『SU N直らじお』に毎月レギュラー出演し、町おこしイベントでも活躍。伝統野菜を使った地元のおいしい料理を紹介し続ける。

## ■ 吉原順平 YOSHIHARA Junpei

(元岩波映画企画脚本担当、映像展示プランナー)

1932年生まれ、1957年岩波映画製作所入所。『岩波写真文庫』編集部、短編映画・テレビ番組の企画・脚本を担当。企画室長を経て、1971年取締役。1975年退社、(株)イメージシステムを設立、代表取締役。2000年解散フリーに。この間、産業映画の営業企画多数。また大阪万国博、筑波万博など多くの博覧会・イベント・展示施設の計画に従事し、エクスポンデッドシネマや映像データベースを手がける。テレビ番組の企画は岩波映画の『年輪の秘密』『日本発見』『生きものぼんざい』シリーズなど。長編記録では中国で撮影した『夜明けの国』(1966/監督:時枝俊枝)の企画・脚本を担当、当時リサーチで半年間滞在した。

(名字アルファベット順)

## 古屋敷村の保存を考える会

山形県上山市の古屋敷村に今は住む人も少なく、映画『ニッポン国古屋敷村』に映し出された茅葺きの家々は日々荒廃が進んでいる。日本の原風景のようなこの村の景観を残し、地域の歴史や生活文化を再び掘り起こしながら新しい交流を生み出す場にしていこうと、2008年11月、古屋敷村の再生に関心を持つ有志が参加、行動する場として「古屋敷村の保存を考える会」が設立された。

会では、多くの人に村の現状を知ってもらい、参加を求めするために様々なイベントを開催しながら、山林から樹木を伐採、樹皮を削り、茅を刈り、手作りで古民家景観の保存に取り組んでいる。

■ 連絡先(メール) [furuyashikimura@gmail.com](mailto:furuyashikimura@gmail.com)

■ ホームページ <http://www8.plala.or.jp/furuyashiki/>

## 古屋敷村保存会

■ 从前小川紳介导演拍摄纪录电影《日本国古屋敷村》的山形县上山市的古屋敷村，今天这里居住的人很少，电影中出现的茅草修葺的房子也日渐荒废。

■ 2008年11月，关心古屋敷村再生的志愿者们创立了“古屋敷村保存会”作为他们参与、行动的场所，要在保留村庄的日本原风景般的景观、重新发掘地区的历史和生活文化的同时，使之成为产生新的交流的场所。

■ 本会为了让更多的人知道村庄的现状，请求大家的参与，举办各种各样的活动，同时从山林砍伐树木、剥树皮、割茅草，用手工的方式进行对旧民宅景观的保存。





映画道場初日の朝、スタッフが谷川の庄に到着すると、玄関の前に『につぼん国古屋敷村』に出てくる「おワりばあちゃん」が杖をついて立っていました。映画公開当時に小川プロが作った等身大の看板でした。いつ誰が持ってきてくれたのか、スタッフは誰も聞いておらず、映画道場のことを聞きつけたバアちゃんが日中の映画作家たちを迎えるために歩いてきてくれたのだ、などとウワサされました。実は映画の中で、古屋敷の稲作を小川プロに指導していた下南沢の花屋義男さんが持ってきて早朝に設置してくれたのです。

花屋さんをはじめお近くの方々が、お漬物や採れたての野菜を差し入れしてくれたり、様子を覗きにきてくれました。おいしそうな山のキノコを持ってきてくれたのがどういう方なのか、はっきりと認識できずに失礼もあったと思います。外からやってきて、ひととき古屋敷の素晴らしい環境に身を置かせてもらった私たちが傍若無人に見えなかったか心配です。古屋敷のたたずまいには、長い歴史、豊かな風土、映画との縁、そして地元にお住まいの方の暖かなまなざしがありました。

集落としての古屋敷は既になくなって久しいのですが、今回のドキュメンタリー映画道場が開催された数日間は、映画を介して集まった年齢も国籍も経歴も違う人たちのコミュニティがこの地に出現したと感じます。古屋敷という特別な磁場が引き寄せた縁が、私たちの記憶に集落体験を刻印してくれました。参加者たちのこれからの映画制作や人生は影響を受けないはずがなく、記憶の中の集落は、一過性のイベントとして消費されない、強く太い絆でつながり続くことでしょう。渡部はるえさんと古屋敷の保存を考える会の皆さん、受け入れてくださった地域の皆さんに深く感謝いたします。

藤岡 朝子

(ドキュメンタリー・ドリームセンター)





## 日中ドキュメンタリー映画道場

### ■ 参加者

大西健児、大森宏樹、川部良太、佐藤零郎、  
季丹(ジ・ダン)、叢峰(ツォン・フォン)、直井里予、  
長岡野亜、黄偉凱(ホァン・ウェイカイ)、  
毛晨雨(マオ・チェンユ)、三宅流

### ■ 講師

飯塚俊男(映画プロデューサー・監督)、  
大津幸四郎(映画撮影)、内藤雅行(映画撮影)、  
吉原順平(元岩波映画企画脚本担当、映像展示プランナー)、  
川口肇(映像作家)、鈴木ウメ子(料理研究家)

### ■ オブザーバー

阿部マーク・ノーネス(ミシガン大学教授)、  
池田将(映像作家)、  
易思成[イー・スーチャン](映画祭ディレクター)、  
大木裕之(映像作家)、大澤未来(映像作家)、  
久保田桂子(映像作家)、  
蕭淑憶[シャオ・スイ](映画祭インターン)、  
向華[シャンホア](映画プロデューサー)、  
朱日坤[ジュ・リークン](映画プロデューサー/映画機関運営)、  
孫悦凌[スン・ユエリン](映像作家)、  
連小楠[リエン・シャオナン](デザイナー)、  
リン・ペイチャオ(学生) ほか

### ■ スタッフ

秋山珠子、佐藤賢、中山大樹、藤岡朝子、馬淵愛、馬淵徹、  
若井真木子、佐藤朱理、鄭伽耶、藤村悦洋

### 古屋敷村の保存を考える会

渡部はるえ、齋藤真朗、山口達也、

木村迪夫、佐藤和美、榎口豊

**料理**：鈴木ウメ子、鈴木学、鏡恵子、木村シゲ子、高橋きね

**そば**：大風正明、大風千恵子

**協力**：日本の宿古窯、せせらぎ館、三恵旅館、  
東北芸術工科大学映像学科、榎谷秀一、太田曜、  
華春、シネマトリックス、堀口昭仁、魚津良太

敬称略



### SELF AND OTHERS 日中ドキュメンタリー映画道場文集

- 編集・制作 ドキュメンタリー・ドリームセンター
- デザイン deworks
- 翻訳 佐藤賢、中山大樹、華春
- 写真 馬淵徹、阿部マーク・ノーネス、川口肇、叢峰、山口達也、吉川マサ
- 印刷 通販印刷の「グラフィック」
- 協力 日中映画道場を支援する会、古屋敷村の保存を考える会、齊藤竹史
- 発行 ドキュメンタリー・ドリームセンター  
東京都新宿区愛住町22 第3山田ビル6F シネマトリックス内  
TEL 03-5362-0671 FAX 03-5362-0670  
E-MAIL doc.dream.center@gmail.com
- 発行日 2010年4月1日
- 助成 文化庁



本文集は、文化庁の委託業務として、《平成21年度「文化芸術分野における海外との共同創作活動を通じた国際交流の推進事業」》が実施した平成21年度《日中ドキュメンタリー映画道場》の成果を取りまとめたものです。従って、本文集の複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。

Documentary  
Dream Center

SELF AND OTHERS

日中  
ドキュメンタリー  
映画道場

[文集]

